みんなの文化財

久葉堂赤木

（樹高 5M、枝張り 10M、幹周 360ｃｍ、樹齢 150～200 年）

与那原町教育委員会

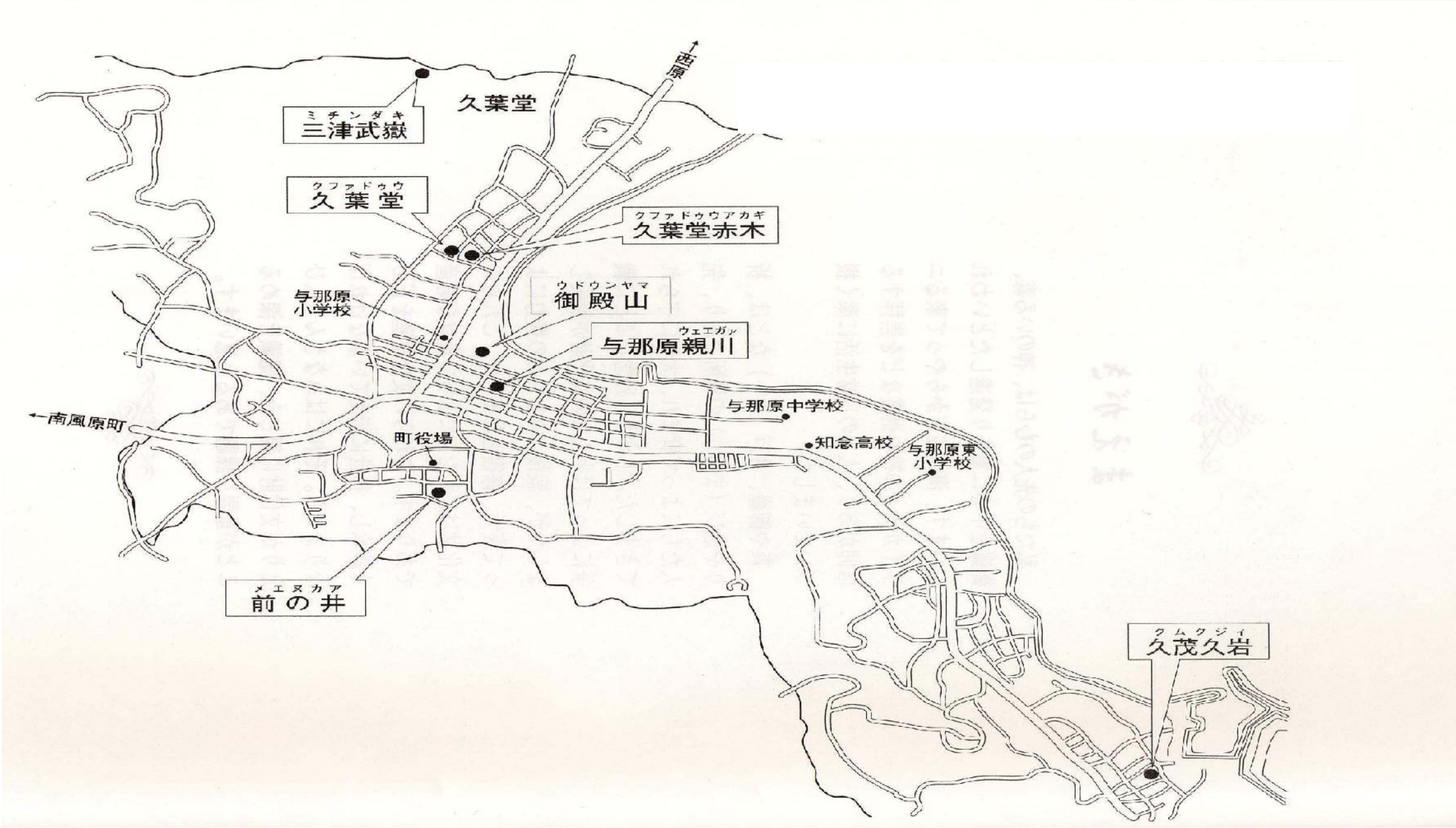
文化財審議委員会

まえがき

私たち先人のむらは、神のいる森、御嶽を中心に集まり発達したといわれています。海の彼方からやって来るニライカナイの神や祖霊などを崇拝する信仰があり、人々の日常生活に深く根づいていました。

森や御嶽、井戸（カー）などは、祈りや遊び（まつり）の場所であり、先人たちによって育まれ、大切に守られてきました。しかし、残念なことに戦争によってほとんどの文化財が焼失しましたが、戦後、みなさんの努力によって復元、修復されました。これらの文化財は、私たちにとって貴重な財産であります。これらの文化遺産を正しく継承し、後世に伝えていかなければなりません。それにはみなさん一人ひとりが文化財に親しみ、認識を深めることが重要な課題であると思います。

【与那原町指定有形文化財位置図】



与那原親川（ウェエガア）　新島区

天地開闢（カイビャク）の昔、御殿山（ウドゥンヤマ）に天降りした天女が、その御子の出産にあたり、産湯を召したとの神話に発し、琉球王朝時代には国王の久高参詣（サンケイ）（旧八月の神拝）の東廻り（アガリウマーイ）や聞得大君（キコエオオキミ）の御新下り（ウアマラオリ）の際、「お水撫（ウヴィナデイ）」の儀式を行うなど、首里出発後、最初の拝所として、休息の御用水を献じた所と伝えられている。琉歌にも「与那原の　親川に　あまくらがいちゃぅん　あまくらやあらん　恩姉おすじ」と歌われた。澄みきって、冷たい水がこんこんと湧きでるこの古泉は人々の崇拝をあつめた霊所である。

又、与那原発祥の頃、我々の祖先は上の毛の高台から下方、隆起沖積しつつある海岸におりたって、この泉を中心に村を興し豊富な余剰水を利用して新島区一帯に水田を開いたという。親川広場はデイゴの古樹に囲まれた町民の団結と憩いの広場として、集会場となり催し場となった。与那原の大綱曳もここから出発し、ここで終結する。

与那原浜の御嶽（御殿山（ウドゥンヤマ））与原区

神名：アマオリツカサ御イベ

名前の由来は、山原から首里の御殿（ウドゥン）に納める木材の置場に指定されたことによる。オモロでは「よなははま　きこゑ　大きみ　やちよ　かけて　と　よまさに　又　あきりくち　とよむ　大きみ　やちよ」にとうたわれている。

「球陽（キュウヨウ）・遺老説伝（イロウセツデン）」に「漂流の大君加那志（オオギミカナシ）」として由来がのっており、戦前は立派なお宮があり、尚家の人々が年に一度お参りしていたといわれる。

聞得大君（キコエオオギミ）の御新下り（ウアマラオリ）の際には最初の休息地となり御仮屋が設けられた場所である。現在も町の行事や東御廻り（アガリウマーイ）のコースにもなっている。

三津武嶽（ミチンダキ） 与原区

『琉球国由来記（リュウキュウコクユライキ）』には「友盛ノ嶽御イベ」とあり、『琉球国旧記（リュウキュウクニキュウキ）』には「友盛嶽」として由来が記されている場所である。

聞得大君加那志（キコエオオキミカナシ）（公式の最高神職）が、琉球発祥の地、久高島に参詣される途中に強い逆風に遭い、薩摩（サツマ）の国に漂流し、一命をとりとめることが出来、無事帰還するが、その時、王女は既に彼の地で懐妊（カイニン）しており、王府からの招きを快しとせず、与那原海岸の御殿山に庵（イオリ）を結んで一生を終えた。聞得大君が死後葬られたといわれた場所であると遺老説伝の伝うる所である。

現在は、子宝の神として子宝を望む人のお参りが絶えない。

久葉堂（クファドゥウ）　与原区

聞得大君加那志（キコエオオキミカナシ）（公式の最高神職）が、琉球発祥の地、久高島に参詣される途中に強い逆風に遭い、薩摩の国に漂流し、一命をとりとめることが出来、無事帰還したがその時王女は既に彼の地で懐妊しており、王府からの招きを快しとせず、隠れているのを見つかった場所とされている。後、三津武嶽への遥拝所（ヨウハイジョ）として尊ばれている。

又、一説には、与原区発祥の頃、他所から移住してきた人々が屋取（ヤードイ）（与原の鳥）を形成し住みはじめた頃、運玉山の一角が土砂崩れをして、その麓（フモト）の数件の住家と住民が生き埋めに遇うという惨事があった。そこで部落の人々がその霊を弔い、魂を鎮めるため、与那原海岸に流れ着いた奇異の珍石を拾い、それを御神体として拝んだ。その後、与原の「鎮守の森」となった。

前の井（メエノカア）（御拝領井）上与那原

前の井は、約１８０～９０年前に作られたといわれ、王府から上納成績優秀な村に贈られた御拝領井（ゴハイリョウイ）である。

共同井戸として長年使用され、部落の祝祭行事の拝み、元旦の若水もここから汲んだ古井であり、現在も安らぎと憩い場としての区民交流の場所である。

久茂久岩（クムクジィ）　当添区

第２尚氏時代（推定約３００余年前）当時、大里間切西原村の島添原の区域であった当添海岸に琉球との貿易に従事する中国船が暴雨風で難破し、数十余名の死者を出した。

当添の人々（西原村の稲福という説もある）が当添小堀（唐船小堀ともいう）に漂着したこれらの死体を収容し、久茂久地の岩に葬って霊を慰めた。後に海神たる竜宮の神（ニライカナイ）も招請し併せて祭った。

又、この地には「三つの壺」の伝説があり、木壺ノ水豊ナレバ其ノ年ハ豊年、壺ノ水少ナケレバ其ノ年ハ旱ス。タトヘ降雨ノ翌日ナリトモ必ズ其ノ水少ナシトの伝説もある。

１『球（キュウ）　陽（ヨウ）』・・・・実録風に編集された編年体の琉球の正史。正巻２２巻、附巻四巻からなり、外巻に『遺老説伝』がある。正巻の初回の編集は 1743 年 10 月から 45 年の 10 月（尚敬 31～33）までの２年間で、その後は代々書き継がれ尚泰 29（1876）年の頃で終わっている。この書にはさまざまな事象が記録されており、王家の譜・政治・外交・経済・文化から役人の人間関係、間切・村の新設・統廃合、地方の行政関係、天地万物の状況、異変現象、諸百姓・士族の善行談にいたるまで網羅している。編者は鄭秉哲、蔡宏謨（サイコウボ）、梁 爆（リョウコウ）、毛如苞（モウジョホウ）の四人。

２『遺老説伝（イロウセツデン）』・・・・王府時代に編集された説話集。遺老（古老）により語り継がれた話の意で『球陽』の外巻として編集された。正巻３、附巻１からなり１４１項目、１４２話が収録されている。編者は『球陽』と同じく鄭秉哲、蔡宏謨、梁煌、毛如苞の四人。収録された説話は北は国頭がら南は与那国まで広範囲にわたり、内容も地名・部落・習俗・祭事・グスク・御獄など由来、英雄伝、宝剣など多岐にわたる。

３『琉球国由来記』・・１７１３（康熙５２、尚敬１）年１１月に成立した王朝時代最大、最古の体系的地誌。全２１巻。琉球古来の祭祀に詳しいのが特色で、琉球の伝統的な社会を理解するのにも最も基本的な文献である。

４『琉球国旧記』・・・１７３１（康熙５２、尚敬１）年１１月に成立した琉球国の地誌。本巻９、附巻１１の全２０巻。おおむね『琉球国由来記』を簡略にして漢文に書き改めたものである。